

中島貞夫（1934-2023）監督は遺作となる2019年公開の『多十郎殉愛記』まで1964年の監督デビューから63本の作品を発表してきました。1970年代後半以降は東映のエース監督として深作欣二と並ぶトップ体制を築き、名実共に東映の屋台骨を支えるエースでした。東大文学部美学科では脚本家の倉本聰と同級で「ギリシャ悲劇研究会」なるものを一緒に設立した経緯があります。また、仏文科の大江健三郎とも同窓の関係にあります。東映入社後は京都撮影所に配属、当時の京都撮影所はまさに「東映娯楽時代劇」の黄金期の只中にありました。この時代劇の最高峰の職人技が文字通りフル回転している現場に飛び込み、映画づくりのすべてを身体に叩き込んだと言っても過言ではないでしょう。今回中島貞夫の数多くの作品中からは是非取り上げたいのは四作目にあたる『893愚連隊』（1966年）です。

1964年の監督デビューの時期は、京都撮影所における時代劇の終焉と任侠映画の台頭が完全に交錯した東映にとっての大転換期でした。そうした中で、中島貞夫はオリジナルシナリオを完成させ、会社側に制作の可否を問うことになります。後の東映の企画・製作の中心人物となる天尾完次（1933-2011）日下部五朗（1934-2020）という同世代の企画マンも実現化に大きく関与します。京都撮影所所長（当時）の岡田茂（1924-2011）はゴーサインを出し、ここに京都撮影所としては初の現代劇が誕生すると同時に東映ニューヴェルヴァーグともいうべき東の間の新感覚を生み出すことになります。プログラムピクチャもしくはB級映画の定義を、低予算かつ会社企画のお仕着せとすれば、本作は低予算ではあるもののプログラムピクチャの枠を超え作家性の強い青春群像劇として、まさに快作と呼べる一作に仕上がりました。本作における天尾完次、日下部五朗、中島貞夫（いずれも30代初めという若さ）の制作に臨む姿は、劇中の三人の愚連隊、松方弘樹、荒木一郎、広瀬義宣のそれと重なるのです。当時の京都撮影所の本流、大御所的存在としてはマキノ雅弘、内田吐夢、佐々木康、松田定次がいて、保守本流の若手ホープの山下耕作がいるわけで、中島貞夫たちは完全にゲリラ戦に挑んだといえるでしょう。任侠道の原理主義たる「ヤクザの美学」を、自由奔放にいきる愚連隊（今の言葉で言えば”半グレ”に当たるでしょうか）の視点を通すことで、滑稽で時代遅れなものとして対比するのです。旧弊なヤクザ世界を生きる人物に本作では他社から天知茂、高松英郎が起用され、決して鶴田浩二、高倉健が登場することはありません。こうした任侠映画をメインに据えながら、反動としての愚連隊の登場は会社の方針に矛盾するものです。そこには、撮影所所長の岡田茂の懐の深さがあったのでしょうか？しかし、答えはおそらくノーであり、岡田茂にはそうした情緒的な感覚とはまったく無縁な、言わば鄧小平的「白猫黒猫論」を徹底した人物だったと考えられます。（白い猫でも黒い猫でもネズミを捕った猫はいい猫だという理論ですね）ビジネスの上では（あくまでもビジネスの上の話ですが）当たることしか考えない冷徹なほどのプロデューサーであり、そのためにはといった人物像しか筆者には思い浮かばないのです。とは言え、『893愚連隊』という東の間の新感覚の名作が生まれたことに岡田茂に感謝しなくてははいけないのかもしれない。

そして、本作のもう一つの観点からすれば、愚連隊の荒木一郎が発する「いきがったらあかん、ネチョネチョ行きとるこっ

ちゃ」のセリフからは70年代安保に向けての生きがいを持ってない若者たちの主張が込められている様を感じることができません。これは、松竹ニューヴェルヴァーグの「政治の季節」に対する強烈なアンチテーゼであり、非政治的な若者たちのリアリティではなかったのでしょうか。大島渚監督の初期作（『日本の夜と霧』『青春残酷物語』など）に描かれる若者は、60年安保闘争の挫折や、左翼思想への絶望・葛藤など、常に「政治や国家という大きなシステム」と対峙する観念的な存在でした。対して本作の松方弘樹たちは、そんな「高尚な政治闘争」からは完全にドロップアウトした（あるいは最初から関心すらない）若者たちです。彼らにとって重要なのは、明日の国家ではなく「今日をどう食い繋ぐか」「組織に回収されずにどう自由でいるか」という肉体的な日常でした。本作の3人組はスマートでもなければ、大義名分ありません。みつともなく、ずる賢く、文字通り「ネチョネチョ」と、システムの間隙を縫って生き延びようとしています。この「美化されない等身大のしぶとき」こそが、高度経済成長期のシステム化されていく日本社会の中で、息苦しさを感じていた当時の若者たちに「これでいいんだ」という、切実な解放感と強い説得力を与えたのだと考えられます。当時サイレント・マジョリティのリアルな生き方を、松竹ニューヴェルヴァーグ的な政治思想とは全く異なるベクトルで「戦後日本の若者の本質（非政治的抵抗）」を証明したともいえるでしょう。

本作に出演した稲野和子（1935-2014）の存在も是非記しておくべきでしょう。中平康監督『砂の上の植物群』（1964年）でも名演を見せましたが、ここでも個性的な演技が光ります。荒木一郎の意外な名演も光ります。

こうした、言わばポップアップ的とも言える作品の精神は、着流し任侠ものの衰退とともに出現する『現代やくざ』シリーズ（1969年-1972年）の誕生、またそこから派生する形態での深作欣二の『人斬り与太』シリーズを確立することになり、1973年からの『仁義なき戦い』シリーズへと連綿と引き継がれるものと解釈できるのです。中島貞夫は、『ジーンズブルース 明日なき無頼派』（1974年）『狂った野獣』（1976年）で再び『893愚連隊』で見せたアナーキー臭芬々たる小気味のよい破滅劇を展開するのです。（文中敬称略）